「人間関係」領域における保育構想力の育成に関する一考察

――幼稚園実習の振り返りと指導計画作成の授業を通して――

工　藤　英　美

1．はじめに

近年、幼稚園、保育所以外で幼児が同年代の友だちと遊ぶ機会が減少している。

幼児を持つ保護者[1]を対象に実施された「第5回幼児の生活アンケート」（ベネッセ教育総合研究所，2016）によると、調査を開始した1995年から2015年までの20年間で、平日、幼稚園、保育所以外で一緒に遊ぶ相手が「母親」である割合が30.9ポイント増加する一方、「友だち」、「きょうだい」がそれぞれ28.8ポイント、11.0ポイント減少していることが明らかになった（Figure1）。

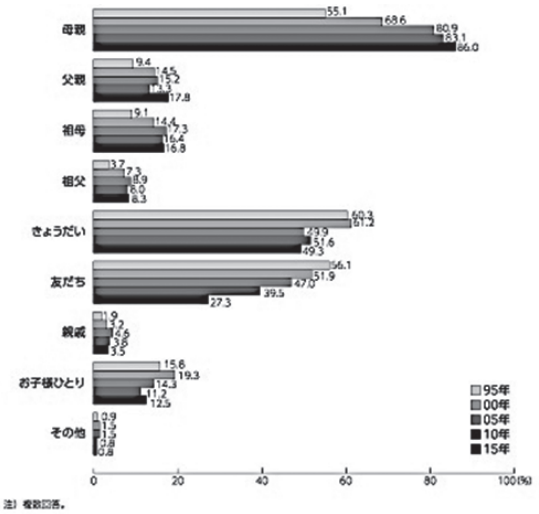


Figure1. 平日、幼稚園・保育所以外で一緒に遊ぶ相手（経年比較）（ベネッセ教育総合研究所．第5回幼児の生活アンケート2016年より）

その背景には、共働きによる保育時間の長時間化や少子化などの社会的変化がある。その影響により、子どもが集団で遊ぶ機会が減少していることから、近年、幼稚園、保育所での幼児教育の重要性が高まっている。同時に、少子高齢化、女性の社会進出、情報化、グローバル化などの社会的変化によって生じる問題に対応できる保育の専門性、保育の質の向上も求められている。

全国の幼稚園、保育所、認定こども園を対象とした「幼児教育・保育についての基本調査」[2]（ベネッセ教育総合研究所，2008，2012）によると、第1回調査では、園の保育実践上・運営上の課題として「教員/保育士等の質の維持、向上」が上位に挙がっていた。その背景には、社会の変化や保護者のニーズの多様化などに対応するための専門性を高める必要が出てきたためと分析されている。そして、質の向上のためには研修時間の保障や給与面の改善が課題として挙げられていた。

ところが、第2回の調査では「教員/保育士等の質の維持、向上」が保育実践上、運営上の最重要課題と認識されているにもかかわらず、第1回調査よりも研修の機会が減少している。第2回調査では、保育の質の向上には「給与面の待遇改善」（71.8％）、「養成課程の教育内容の充実」（66.2％）、「保育者同士が学び合う風土づくり」（61.9％）の必要性が挙げられていた。この背景には、保育者不足、非正規雇用保育者の増加（国公立の幼稚園、保育所ではおよそ50％を占める）、保育計画・園の評価などによる事務の増加、幼稚園では預かり保育等による保育時間の長時間化、多様な勤務態勢などが挙げられる。ここで浮かび上がってくる姿は、日常の保育を実践することで精一杯の現場の状況である。1つは、人手不足や保育に関わる

事務の増加、多様な保育ニーズへの対応、勤務のローテーションなどのために研修時間の確保が難しい状況が窺われる。もう1つは、保育現場で若手保育者を育てる体制が維持できない状況が考えられる。人材確保の困難さ、多様な勤務態勢などが影響し、日々の膨大な保育業務の中でベテランが若手を育てる時間が確保できない、あるいは若手保育者を育てる体制が作れないなどが考えられる。このことが「養成課程の教育内容の充実」の必要性に反映しているのではないかと推測する。若手保育者を育成していくことが難しい中で、多様な保育ニーズに対応していくためには、ある一定水準の保育の質が備わっていることが、若手保育者に求められているのではないだろうか。では、現場で求められる保育の質とは何だろうか。

本稿では、まず養成段階において求められる保育の質とは何かを明確にする。次に、幼稚園教育実習中の事例より、実習生が人間関係のどういう側面に意識を向けて事例を選んでいるか考察する。また、指導計画作成の授業を通して、保育構想力を育成する授業実践について考察する。

2．養成段階で求められる保育の専門性と資質

幼稚園教員の専門性と資質について具体的に触れているのが、幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために」（平成14年6月24日）である。

幼稚園教員に求められる専門性として、幼児を理解し総合的に指導する力、具体的に保育を構想する力（実践力）、人権に対する理解、特別な支援が必要な幼児に対応する力、家庭との連携を図りつつ教育を展開する力、小学校や保育所との連携を推進する力などが挙げられている。ここでは、知識や技能、能力の総体を幼稚園教員の資質と捉えている。さらに、幼稚園教員の資質向上における現職段階での課題は、園内、園外研修という研修の機会を活用し、資質向上を意識することであるとしている。研修とは、幼児理解や保育に必要な基本的知識及び技能をさらに高める機会や、多様な保育ニーズへの対応など経験に応じた資質の向上を図る機会であるとしている。

それに対して、養成段階では「幼児理解に基づき、遊びを通じて総合的に指導するという基盤的な専門性を養成すること」が目的であるとする。そして、養成段階で身につける保育の専門性や資質は「具体的に保育を構想し、実践する力の基盤」であるとしている。また、養成段階での課題は「実践力の育成」であり、実践力を育成するためのカリキュラムや「理論と実践を結び付ける授業内容」の検討の必要性が指摘されている。

3．保育内容「人間関係」における授業実践

（1）授業の展開

筆者は、幼稚園教員養成課程のある大学で、保育内容「人間関係」の授業（2年次）を担当している。保育内容「人間関係」の授業の一環として、幼稚園実習中の人間関係に関わる事例から子どもを理解し、それを基にした指導計画の作成について、グループ討論を実施した。

予め実習前に、実習中での人間関係に関わる事例を1つ持ち寄る課題を提出した。事例は人との関わりの場面であれば特に追加の条件は提示しなかった。それを実習後、最初の授業の中で400字程度にまとめさせた。その事例を年齢と場面が同様のもので分け、1グループ2人から5人で7グループを作り、そのグループで話し合いをさせた。グループ討論の内容は以下の通りである。

まず、各自の事例の概要をグループ内で発表し合わせた。それから、人間関係についての指導計画（主活動の指導案）を作成するよう指示した。指導計画は、「人間関係」領域において育つことが期待される、生きる力の基礎となる「心情、意欲、態度」を「ねらい」とし、「内容」「環境構成」「保育者の援助」を作成させた。具体的には、事例からどのような発達がみられるのかを読み取らせたものを簡易的ではあるがそのまま「ねらい」とした。その「発達しようとしている力（ねらい）」

を培うために、幼児が主体的に環境に関わりながら、具体的活動を通して発達に必要な経験を得られるよう「内容」を立案し、そのための「環境構成」や「保育者の援助」を作成させた。指導計画は、グループの中の 1 人の事例を基に作成するか、あるいはグループ全員の事例を基に作成するかのいずれかを選択させた。最後に、作成した指導計画のグループ発表を行った。

ねらい及び内容は幼稚園教育要領、保育所保育指針の「人間関係」の部分を参照した。

(2) 学生の事例

学生が持ってきた事例の多くは、子どもの年齢に関わらず、いざこざなど子ども同士が関わることによるトラブル場面であった。友だち同士で仲良くしていたという事例はわずかであった。

年齢的な特徴としては、3 歳児では友だちだけではなく保育者との関わりに関する事例が報告されていた。また、5 歳児になると、実習期間が 11 月ということもあり、就学を意識した給食指導場面など、遊び場面ではなく、生活場面での事例も報告されていた。

これらの事例から、学生は保育を実践する上で「保育者の援助」を重要視して重例を拾っていると思われる。一方、保育者の仲介がすぐに必要でない場合は、発達を見過ごされやすいとも言える。しかし、事例を読むとトラブルに対してどう援助をしたらいいか悩む記述も多く、学生が事例を自分の問題として捉えていたといえる。

また、学生は生活場面よりも遊び場面での人との関わりについて注目している傾向がみられた。

(3) 保育構想力を育成する授業実践

保育の構想力を育成するために、指導計画（主活動の指導案）の作成を通して、理論と実践を結び付ける授業実践を行った。この実践から、学生は保育を構想する上でどのような点に困難さを示すのか、また、保育構想力を育成する授業ではどのような点に留意したらよいかを考察する。

まず、学生がどの点で困難さを示すかについて、指導計画（主活動の指導案）の項目（ねらい、内容、環境構成、保育者の援助）に沿ってみていく。

【ねらい（発達しようとしている力）】まず、事例からどのような力が発達しているのか読み取りを行った。特に 3 歳児を対象にしたグループでは、「思いやりを持つこと」、あるいは友だちと一緒に遊ぶことを「協調性」「協同性」が発達しようとしていると読み取っていた。友だちと協同的な遊びを展開するまでには、いくつかの発達段階を踏まねばならないが、学生は発達段階を考慮したり、発達の年齢的傾向を考慮し発達を捉えたりすることが難しいようだった。これは、学生が発達を言葉では捉えているものの、実際の子どもの様子と結び付けて捉えることが難しいためと思われる。

また、4 歳児を対象にしたグループでは、思いやり、友だちの存在を受け入れる、協同性など、1 つの事例から多くの発達を読み取っていた。しかし、ねらいが多すぎて、全てを考慮し具体的な活動を設定できず、「内容」をいくつも挙げていた。これも学生が各々の発達がどのように関連し、相互に作用しながら発達しているのかというところまで捉えることが難しいようであった。

【内容】指導計画の作成前に、幼児が主体的に環境と関わり、具体的な活動を通して発達に必要な経験が得られるような内容を設定するよう指示した。しかし、「内容」に「友だちと一緒に砂山でトンネルを掘る」と活動のみを挙げているグループが多くみられた。学生は具体的な活動を通してどのような経験をさせたいかを尋ねれば「友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう」と答えられることから、教示だけでは「内容」について十分理解を促すことができなかったと思われる。

また「ねらい」を意識しすぎるあまりに、発達の年齢的傾向を考慮せず「内容」を立案する傾向もみられた。

【環境構成】「環境構成」について作成していないグループがいくつかみられた。学生は、全体的に環境構成の重要さを認識していないようであった。幼稚園教育では環境構成がとても重要であるが、学生にとって環境構成は、保育を実践する上

で、準備的な要素として捉えられているように思われた。

例えば、入園当初の3歳児の場合「砂場で友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう」という体験をするためには、3歳児という年齢を考慮し、スコップを人数分用意しておくという環境構成が考えられる。人数分スコップがあれば物の取り合いも減り、友だちと一緒に砂遊びを満足するまで楽しめるだろう。それに対して、物の貸し借りを経験させたいならば、友だちからスコップを借りる状況を作るため、環境構成でスコップを人数よりも少なくする必要があるだろう。このような環境構成の重要性を学生に理解させる必要がある。

【保育者の援助】「保育者の援助」は授業の中で事例検討を行う機会が多いからか学生にとって立案しやすいようだった。保育者の援助としては、「お互いの気持ちを受け止めた後で、互いの思いを伝え、他者の気持ちに気づかせる」などの子ども同士を仲立ちする援助や、子どもの思いに共感するなどであった。また、保育者の援助の多くはトラブルなど問題が生じたときの援助だった。一方、年齢や発達に応じて援助を考えたグループはごくわずかであった。

上記のように、実習の事例から指導計画を作成させたが、学生は発達過程や発達の年齢的傾向、さらに各々の発達のつながりを考慮して立案することがとても難しいようであった。これは発達を言葉では理解しているのだが、実際の子どもの様子を想像できなかったためと思われる。また、内容や援助などに比べ、環境構成の重要さが理解されていないことも課題であった。養成段階において保育構想力を育成するには、理論と子どもの姿を結び付けて想像できる想像力を育成することが必要であると思われる。そのためには、事例（文章）の読み取りだけではなく、実際に園生活を送っている子どものビデオから読み取りを行うことで、学生は子どもの様子を想像しやすくなるだろう。

4．おわりに

本稿の目的は、まず養成段階において求められる保育の質を明確にした後で、学生が人間関係のどういう側面に意識を向けて事例を選んでいるかを考察することと、保育構想力を育成する授業実践について考察することであった。

養成段階において求められる保育の質とは「具体的に保育を構想し実践する力の基盤」であった。

また、学生は保育実践では「保育者の援助」を重要視していることが窺われた。そして、養成段階において保育構想力を育成するには、発達過程（理論）と実際の子どもの姿とを結び付けて想像できる想像力が必要であると思われる。学生にそのような想像力を授業の中でどのようにつけさせていくかは今後の課題である。

謝辞

本稿執筆にあたり、ご助言賜りました愛知県立大学の山本理絵先生に深く感謝申し上げます。

注

1）この調査は全国調査ではなく、首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の保護者を対象としている。

2）幼児教育、保育全体の実態調査。第1回調査は教育基本法改正後の2007年（幼稚園対象）、2008年（保育園対象）に実施され、第2回の調査は現幼稚園要領、保育所保育指針が施行された（2009年）後の2012年に実施された。認定こども園については第2回の調査のみ。

引用・参考文献

厚生労働省.（2008）. 保育所保育指針解説. フレーベル館.

文部科学省.（2008）. 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.

ベネッセ教育総合研究所. 第1回幼児教育・保育についての基本調査報告書. 2008年.

ベネッセ教育総合研究所. 第2回幼児教育・保育についての基本調査報告書. 2012年.

ベネッセ教育総合研究所. 第5回幼児の生活アンケート

レポート．2016 年.
幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議.（2002）.「幼稚園教員の資質向上について−自ら学ぶ幼稚園教 員のために」（報告）．文部科学省